

倫理法人会で行なう純粋倫理の指導（いわゆる倫理指導）は、被指導者（受難者）の病気を治したり業績を向上させたりすることが目的ではなく、人の本来のあるべき姿を指し示すところにあります。そして指導者は被指導者に対して「種々の思いを腹に溜め込んだりせず、あっさりと言つてのけ、また、嫌がるのでなく積極的に感謝の念を注げる人になりましょう」と実践を勧めるのです。そこにこそ、人が本当に生活を変え、心を変えていく純粋倫理の指導があります。

倫理指導を行なう指導者は、法人スーパーバイザー、倫理経営インストラクター、参事、倫理経営インストラクターの資格を有する副参事、そして倫理研究所の研究員です。

倫理指導の目指すところは、単に問題（苦難）解決のためのテクニクや方策の伝授ではなく、困難に直面している人の心のくせ、純粋倫理から外れている生活を見抜き、心の奥底に眠る純情（スナオな心）を引き出すところにあります。

言葉を変えれば、「倫理指導の着地点」をいかに見定めるかということであり、倫理的に解決するとは、単に苦難が消滅することではなく、その苦難を通して人の生き方や生活が変わつていくものであることを指します。

苦難救済の原動力となる倫理指導によって物事がスムーズに展開するドラマを、実に多くの全国倫理法人会会友は経験してきました。昭和五十七年、事務所移転に伴う旧事務所の売却契約が成立し、「物に対する倫理」を体得したある経営者の事例を紹介します。

当時の不況の影響を受け、手を尽くして努力をしたものの容易には売れず、新旧事務所両方のローンを支払わねばならず資金繰り

一発逆転の倫理指導 起死回生の一言



映 栗木 元

面で非常に苦しみました。その時、「旧事務所が最高にすばらしい事務所であると信じ、わが子を嫁にやる心境で、人手に渡っていくことを祈ること」と、その経営者は思つてもみない倫理指導を受けたのでした。

「とにかく早く売れてくれればよいということだけを考えていた。この事務所を取得するにあたり、どれだけ多くの方々のお世話になったかを忘れていた。事務所に対して不足不満が多く、本当にすばらしいものと思つていなかった。自分がよいと思わないものを、他人に買ってもらえるはずがない」との深い反省に至り、それ以来、指摘通りに旧事務所の清掃を真心込めて実践し続けたのです。

実施から八カ月が経過し、次第に事務所への感謝の気持ちも深まり、清掃によつて自分と事務所が一体であるかのような気持ちになったのでした。そして、「最高にすばらしい事務所だ」と思える心境に達したとき、予想していたよりも高い価格で売却することができたのでした。その経営者は「物に感謝する意義を体得しました」と感慨深く語ります。

事務所売却前後の心持ちの変化が示すように、容易に売却できなかつたのは、不動産不況のためでも価格のためでも立地条件のためでもなく、物に対する心の姿勢に端を発していたと捉えることができるでしょう。

指導者の一言が苦難を解決する鍵だったように思われますが、この事例の核心は、経営者が自身の心持ちの誤りに気づき、そして改めるための実践を、教えられた通り、そのままに実行したことにあります。

その一点をこそ、強く銘記したいものです。

（新世書房刊『個人指導真剣勝負』倫理指導とつておきノート』参照）